

信  
仰  
の  
譬  
へ  
話

020793-000-9

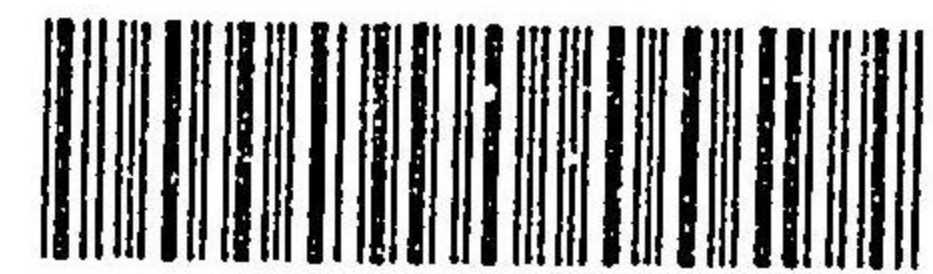
特53-532

信仰の譬へ話

佐藤 哲 / 訳

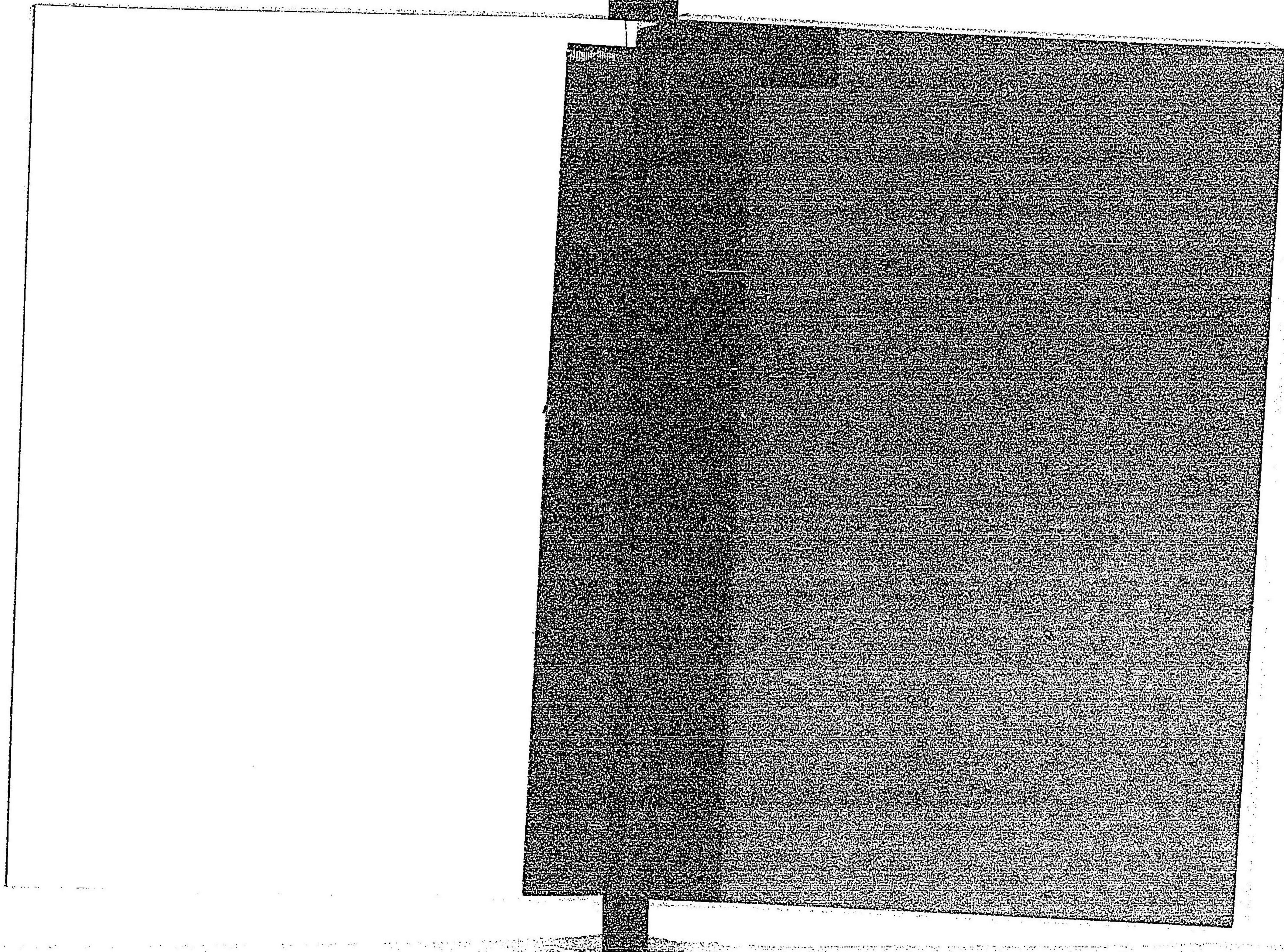
M24

ABI-0619



特

5



T-76

54  
171

明治三十四年三月刊行

話はなし

譬たと

の

仰おほ

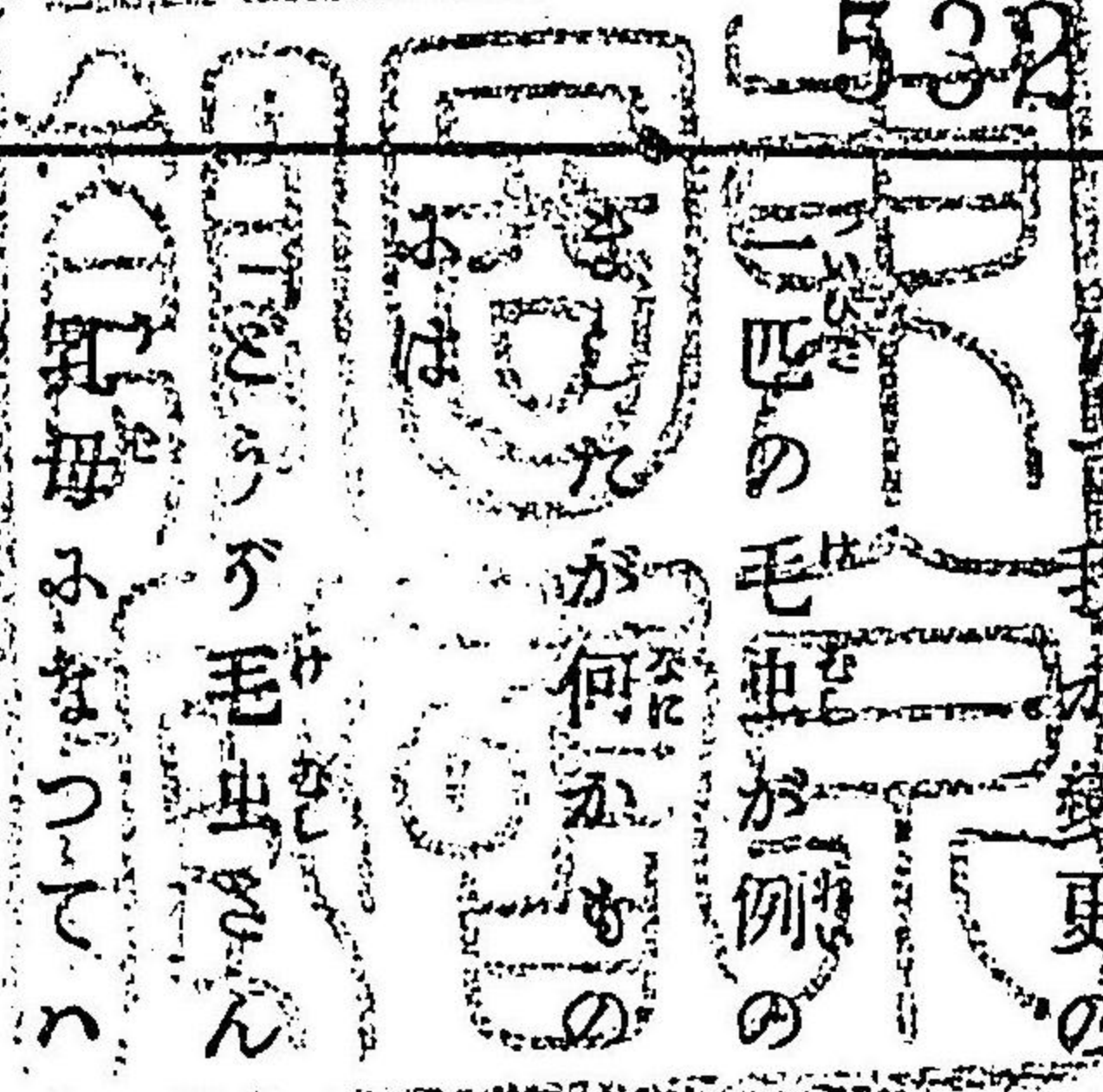
信ま

米國聖教書類會社

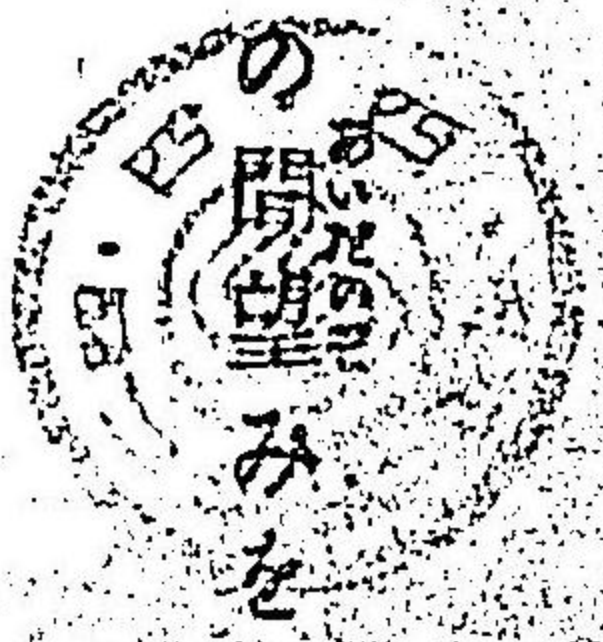
信仰の譬へ話

人もし死しなばまた生いんや我われへのが征戦せいせんの諸日しよじつの間望まをみを  
りて我われへ更さらの來きたるを待まちたん

(約百記第十四章第十四節)



乳母ちちもなつてハ呉くれますまいか、見みて下ください此この小こな卵たまご  
をいつまこのたまご一ひとつ此卵このたまごが孵かり出でるか知しらないが、も一ひとつわたしは  
此様このように弱よほつて氣分きぶんが悪わるくつて、たまらぬいもしわたしが



死んだら誰が此の子供を養つて呉れるでしやう、これ親切な、やさしい、青い毛虫さん、お前さんにお世話を願ひます、併し一言云ひ置かねばならぬおと、どうぞ食物ふよ／＼注意して下さい、御存の通り子供には粗ひ食物をくわせること、できませんから決して茶葉なふか食べさせないで、朝早く降る露か花の甘い蜜かを食べさせて下さい、又初の中、のりんなに飛ぶ事ができますまいから、少しづつ飛べせてやつて下さい、を、不んに、お前さんの飛べなかつたんでしたね、併し最早ほかの乳母を探して居る暇はないから、何分にも出来るだけのお世話を願ひます、どうぞあーどうしてこんな茶葉の上なにかに卵

を生んだのでせう、外に善い所もありさうなものでしたに、と嘆息しました、しかし今更仕方ありません、お前さん、の親切、お世話して呉れませう、其お禮として、わたしの羽の金沙でも、とつて置いて下さい、を、も、一、眩がしてたまらぬ、毛虫さん、呉れ／＼も子供の食物の事を覺て居て下さい、と云ふ言葉の終はらぬ中に目を閉て死んで仕舞ました故、毛虫、はいともいやとも返事する間もなく、蝶の産みつけた卵の傍に残されて、獨言しますには、「蝶どの、い、乳母を擇んだものだ、又わたしもい、役を頼まれた蝶どの、氣でも違ふたのかしらん、左もなければ、わたしの様な、匍匐虫に可愛子供なにか托けるわけが

ない、この子供達でも今に美しい羽がそへて自由に飛べる様にすれば私おにか見捨てしまませう、あ、あの人達は身には綾錦の衣裳を着て居ても愚かな者ではないかと含糊ましたけれど最早何と云つても蝶の死んで仕舞て卵の菜葉の上に残された故親切な毛虫は氣の毒に思ひあ、出来るだけの世話を致さうと決心いたしました、併し其夜は毛虫も餘り心配になりました、能くも眠りやられず卵の産みつけてある周囲を廻りつづけて脊骨が痛くなる程でした、翌朝ふなつて思ひますに三人よれば文珠の智慧とか云ふ事があるから誰か賢ひ者に相談して見ませう、併しわたしの様な匍匐虫はやつぱりだ

めてせう、一つ困難なのは誰か相談したらばよいかわからないあ、あの庭に犬どのが来るが一つあの犬も相談をして見やうか、されど犬どのの餘り亂暴で此の卵をあのしやきばつた尾で一拂にして仕舞へせぬか、虎猫どののいつも彼の林檎の樹の下で日なたぼっこをして居なさるがわたしの能い相談相手になるふ違ひない併し何と云つても虎殿の氣儘な人だから餘り相手などにはなつて呉れまいかしらん」と推察し毛虫も大嘆息して誰が一番賢からう」といひながら考へ考へ殆ど考に盡きましたか終ふ雲雀のことを思ひ出しました毛虫の雪雀の誰も見へぬ程高い空に飛び上るからさう物知りであら

うと思ひ、よい相談相手を思ひ付たと大層悦びました」  
 借近邊の麥畑に雲雀か住ひましたたが毛虫の其處へ使を遣  
 りまして雲雀も相談に来て呉る様に頼みましたた、雲雀は直  
 にまいりましたたが毛虫は自分と全く異な動物、蝶の子供な  
 どを養ふようお食物なきに、殆ど困り入ると云ふ事を談  
 し、又雲雀にこのい申しますには

「雲雀さん今度お前さんの空へ飛ひ上りなされる時に、何  
 か善い物を聞て来て話して下され」と其處で雲雀は「左様  
 さ何か聞て来るかも知れん」と申しました然し其後一言も  
 いはず直に晴れ渡りたる青空へ飛ひ上りましたたが漸々  
 高く飛ふにつれて雲雀の歌ふ聲も微になり終にはさつ

ぱり何の聲も聞こへぬ様になりました故毛虫は上を向  
 て見やうと致しましたしても上ほ向く事へ出来ません譬へ  
 上が向けましたとしても遠くを見る事が出来ませんか  
 つたから苦しむ目をして毛虫の身体で立ち上るのも無  
 益で御坐りました故毛虫へ又初の様には匍匐て卵の周圍  
 をぐるぐる菜葉を嘗めながら廻つて卵の番をして居り  
 ましたたが餘り雲雀か下りて来るのが遅いものですか  
 毛虫は待ち草臥れて「まーなんと雲雀どのと長いこと今  
 頃何處に居なされるかしらん、もしわたしが見へるなら立  
 て見るのだけれど何と云つても立て見ても見へぬから  
 無益だ、今度ハ雲雀どのハ非常に高く上りなされたを見

へる「あ、わたしも雲雀どのと行く處が知りたいたいのだ  
 又彼の青空で何んか奇妙な事が聞こへるか聞きたいもの  
 だ」雲雀どのの上るにも下るにも始終歌ひ續て居なさる  
 けれど中々秘密へ漏して下さらない、どうして雲雀どの  
 へ中々うち氣だからな、  
 儲毛虫へ待て居る間に卵の周圍を一廻り致しました、漸  
 の事で雲雀の聲が聞こへてまいりました、毛虫へ嬉しさの  
 餘り飛び立つばかりで御坐りましたが間もなく雲雀の鋭  
 い聲で歌ひなから菜畑へ下りてまいりました、申すすふ  
 「毛虫さん、毛虫さん、善い音信がある然しいけあい事ふへ  
 お前さん私の云ふ事ふか信じなさらないだらう」わた

しの何でも人に云へれる事へ信じます」と毛虫へ周章て  
 答へました、「うんなら此蝶の子供は何を食させてよいか  
 教へてあげようか、あ、お前さん其物を何んだと思ひな  
 さるか當てごらん下さい」左様さあ、朝の露か花の蜜で  
 もありませんと毛虫が申すといふ、お老婆さん、そん  
 な物ではないもつと容易く取られるものだ」と雲雀が答  
 へましたれば、毛虫が獨りで含糊きますに  
 「其れでもわたしに容易く得られる物と云へば茶葉で、  
 もなければ他にへなにもない」  
 「極々上等です、お前さん當ふさつた、さ、其茶葉で子供を  
 養ひなされば宜しいのだ」と雲雀のほめそやして申しま



毛虫「答へますに、いゑ、いゑ、茶葉だけへ食させて呉れるな  
どの母の胡蝶の遺言でした」

雲雀「けれど最早死だ者あにかへ何にも知らないでいな  
か其んならわたしが教へ上げれば信じないくせに何故  
わたしになよか尋ねなされる前さんの本當に信仰も信  
用もない人ですね」

毛虫「わたしは何んでも人に言へれる事へ信じます  
雲雀「けれど、一言ひながら信じなされぬでいな、食物  
の事なにかへまだ私が前さんに種々話らふとする事  
の始だのに、其れさへ信じなされぬ、毛虫さん、此小な

卵が何に解ると思ひなされるか

毛虫「其れは言はずも知れた事蝶に解るのさ」と申しますと、  
雲雀「毛虫に解るのです、お前さんも其内には此の事  
の眞だ」と云ふ事を見出しなされるであらうと歌ひまして  
雲雀「いつまでも此事を議論する事を好みませんかつ  
たから、其儘飛ひ去りましたさう致しますと其後で毛虫  
が申ますには、雲雀どのこそは親切な賢い人だと思つた  
のに當が違ふて矢つ張りあの人も愚かな不禮な人だ、大方  
今度へ餘り高く上り過ぎたに違ひない、誰でも人へあま  
り高く昇り過ると馬鹿らし、又亂暴になるものだ、あー  
雲雀どのへ彼の空で誰に遭遇のかしらん、不思議でたま

らない(世人)屢々自己(己)の天の奥義を知らずして己の智に  
 傲り已に優る者なきが如く(思考)し神の眞理を聞くも之  
 を信せず却て道を説くものを愚なりとなす(如此)人は宜  
 しく此毛虫に學ぶ所あるべし(雲雀)の再(再)ひ空から降りて  
 来て歌ひまするに(毛虫)さん、もし信(信)じなざるなれば(前  
 さん)に話して上る事かある(毛虫)は信(信)ずるとも信(信)ずると  
 も何んでも人に話される事は信(信)ずると操返(操返)し申(申)ます、と  
 (雲雀)の其(其)れあれば或(或)る他の事(事)を話して上げやう(私)の善  
 い報(報)の後に残して置(置)ひたのだ其(其)れ(かう)云(云)ふ事(事)です、(前  
 前)さんもいつか胡蝶(胡蝶)になる日(日)か有(有)であらうと(呼)びまし  
 たれば(毛虫)「(雲雀)の畜生(畜生)め如何(如何)にわ(わ)さし(下)等の動物(動物)だ

とてわたしをこ(こ)嘲弄(嘲弄)するの(の)餘り酷(酷)いではないか、も  
 ー(前)さん(に)に(論)しな(に)か請(請)はない、一時(一時)も早(早)く此  
 處(處)を立退(立退)きなされ」と大(大)聲(聲)に申(申)ましたれば「さ(一)其(其)れだか  
 らわたし(に)前(前)さん(に)信(信)じな(され)ぬだらうと云(云)つたの  
 だ」と(雲雀)の方(方)でも、(じ)れて申(申)ました、(毛虫)の(私)の何(何)んでも  
 人(人)から言(言)はれる事(事)の信(信)ずると云(云)ひ張(張)りましたが、又(又)少(少)し  
 躊躇(躊躇)して申(申)ましたに、其(其)れ(何)んでも信(信)ずる道理(道理)の有  
 る事(事)なれを信(信)ずると云(云)ふ意味(意味)だけれど(前)さん(の)胡蝶  
 の卵(卵)が(毛虫)に孵(孵)るだ(の)此(此)んな(ろ)く(匍)匍(匍)て居(居)る(毛虫)  
 が(蝶)ふなるだ(の)と云(云)ふ様(様)な、(と)んでも無(無)い事(事)を(わたし)に  
 話(話)しな(ざる)ではないか、如何(如何)に(前)さんが利(利)口(口)だからつ

て自分だつても此様な事が出来る道理があると信じな  
 されぬであらう(人間の浅き智識を以て天理を悉く知る  
 事能はず屢々道理上より説明する事能はざる眞理ある  
 べし)雲雀丁寧に申ますにはわたしは元より此事は知り  
 ませんが私が彼の地にある麥畑の上を飛んでも高き青  
 空の中に入つてもあの様に多の不思議な物を見るから  
 此外にもつと不思議な物が無いとする理由もありませ  
 んをー毛虫さんね前さん、いつも、匍匐てばかり居て菜  
 葉の上より外へ出なざる事があいから此んな事が出来  
 る道理がないと言ひあさるのだ(唯此世の事のみを思ふ  
 者、今世の樂にのみ耽るもの此世より勝れる所あしと信

ず然れども人一度心の眼を開て天を望めば遙に勝る國  
 あるを知り又其榮光を見るを得べし)毛虫無茶な事を言  
 ひなさるな私だつてもどんな事が出来るか、どんな事が  
 出来ないか位へお前さんと同じ位私の經驗から又私の  
 才力で知つて居ます、私の長い青い身軀を見て下さい、此  
 んな有様だのに、わたしの身軀から羽か生へるだの紋形  
 のある衣裳を着ける様になるだのと云ひなさるが馬鹿ら  
 しい事ではあいか雲雀の方でも御前さんこそ馬鹿な人  
 だ毛虫さんば、もすこし賢さうなものだにお前さん、言  
 ふても分らぬ事を論じやうとするのへ愚か事ではあいか  
 お前さんわたしが彼の奇妙な不思議な世界に上る時

悦び歌ふ讚美の聲の空に響き渡るを聞きなさらぬかを  
 一毛虫さん彼の高ひ處から來る事何んでも私の様に  
 信じて受け容れなされと云ひましたれば其れがお前さ  
 んの云なさつた……と申かけましたれを雲雀は(信仰)  
 と云ふ事ですと口を入れました、  
 毛虫「其れなれば如何して信仰と云ふ事を學びませうと云  
 つて居ります時不圖毛虫の側の方に何か、こりくする  
 者があると思ふて見廻しましたれを八九疋の青い毛虫  
 が匍匐て居て其上最早菜葉に小き食ひ穴をあけて居る  
 様に見へました此の小な毛虫の皆胡蝶の卵から解へ出  
 たのです」

毛虫の心へ今ハ耻と驚とにて一ぱひになりましたが直  
 に悦か來りました如何と申すにもし第一の事(即ち蝶の  
 卵が毛虫に解る事)が出来るなれを第二の事(即ち自分が  
 蝶になる事)も出来るに違ひないと思ひましたからです  
 其處で毛虫ハ雲雀に「どうやあなた御教訓を願ひます  
 と申したで御坐りませう、雲雀も上ハ天下は地の不思議  
 に妙なる御業を稱め歌ひました、  
 毛虫は其残りの生涯を自分がいつか胡蝶に變るであらう  
 と云ふ事を親族の者達に話してをくりました然し親族の  
 中ハ誰一人として毛虫の云ふ事を信ずる者ハありませ  
 んかつたしかし毛虫ハ雲雀ハ信仰と云ふ事を習ひました

から自分の身体がしをし繭の中で蛹の姿に變りました時  
 にも「いつか蝶に變る事があるであらう」と申ました、親族共  
 は此を聞き毛虫は發狂をしたので「ないかしらん憐れな  
 者だ」と申しましたが、毛虫が其後蝶になつて再び死にまする  
 時申ましたには「私の數多の不思議を知つた、今の信仰をも  
 つて居るから此後に起る事ハ皆信じ任せる事が出来る」と  
 (神を信せざる人々ハ言ハん人間一度死せば如何して再  
 び甦る事あらんと然れども毛虫の蝶に變ぜし如く神を  
 信ずる者ハ必ず榮の身体に甦る可し)

明治二十四年三月二十日印刷  
 明治二十四年三月二十日出版

繙譯者 佐藤哲

横濱山手百七十八番館  
 フエリス英和女學校

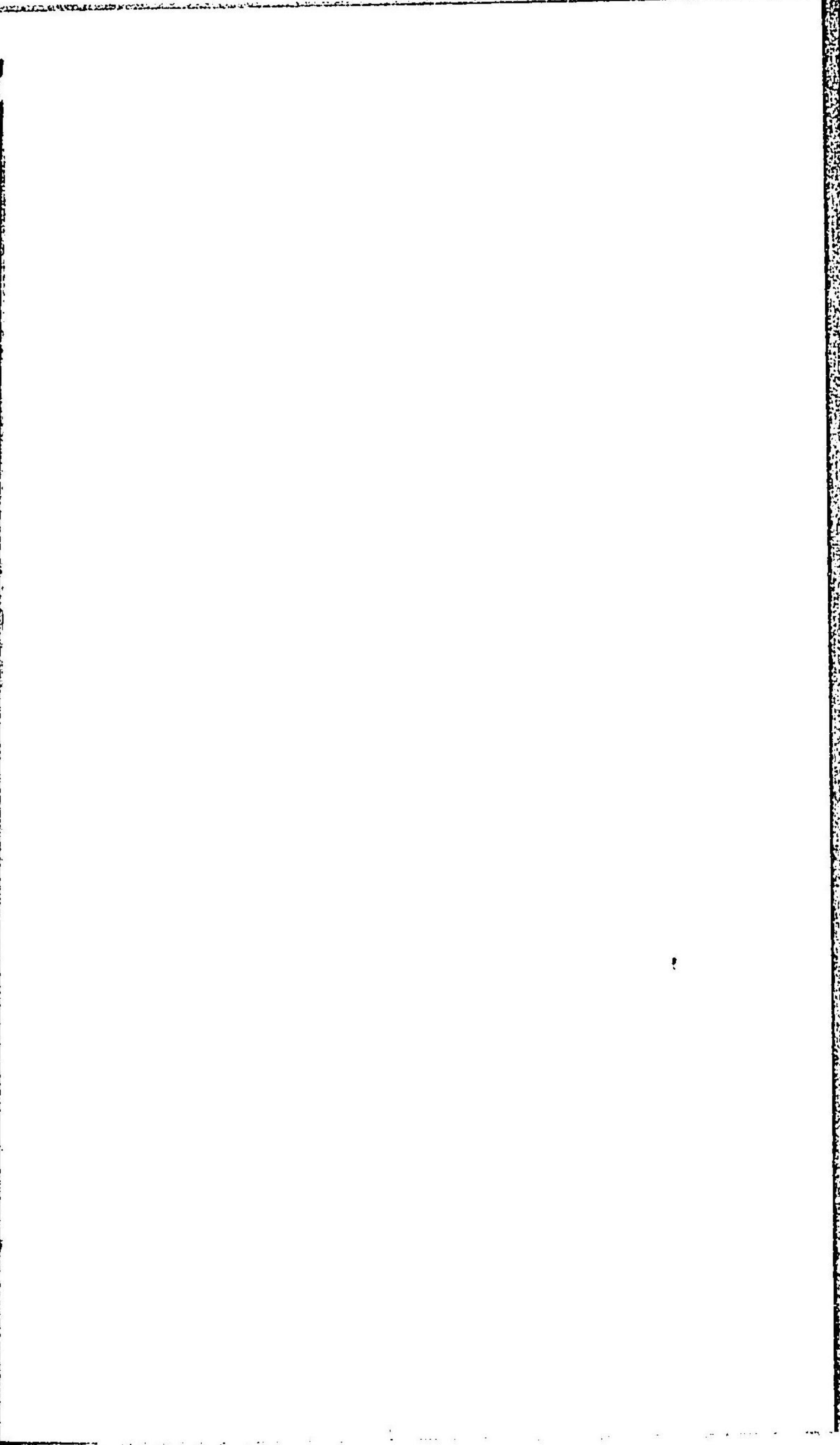
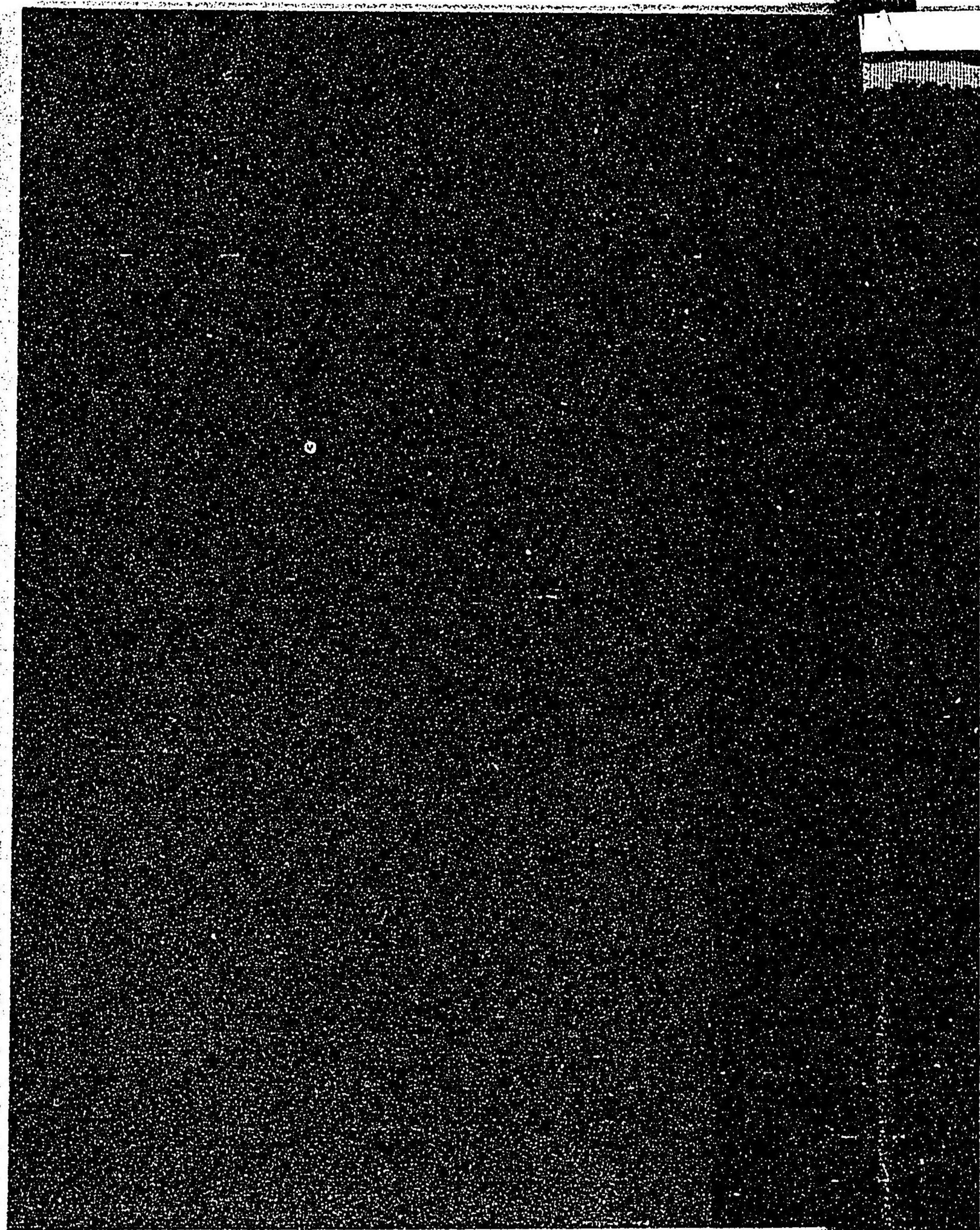
發行者 石本三十郎

東京府下荏原郡大崎村  
 字白金猿町八十五番地

印刷者 廣瀬安七

東京兜町一番地  
 製紙分社

T-76



53

52